Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-29

神戸大学におけるバイリンガル国際共修授業 : 「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」の授業設計について

黒田, 千晴
ハリソン, リチャード

(Citation)
神戸大学留学生センター紀要,22:89-105

(Issue Date)
2016-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81009480

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009480

KOBE UNIVERSITY

神戸大学
留学生センター紀要　22：89 ～ 105，2016

神戸大学におけるバイリンガル国際共修授業
―「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」の授業設計について―

黒田　千晴
リチャード　ハリソン

キーワード：神戸大学国際学生交流シンポジウム、国際共修授業、異文化間能力、
バイリンガル

はじめに

神戸大学留学生センターでは、過去20年間に渡り、神戸大学国際学生交流シンポジウム（Kobe University International Students' Symposium、以下KISSと記す）を実施している。KISSの誕生は、阪神淡路大震災が発生した1995年にさかのぼる[1)]。1995年、当時の留学生センターの教員が中心となり、キャンパス国際化（Internationalization at Home）促進に向けた取り組みとして、留学生・一般学生[2)]からなる実行委員とともに第１回KISSを開催した。KISS創設の理念は、留学生及び一般学生が、国籍や言語の壁を越えて、自由闊達に議論し、相互交流を図る場を提供することであり、この理念は20年間、一貫して継承されている。

KISSは、一般学生・留学生（約10名～ 15名前後）で組織される学生の実行委員が、留学生センター教員アドバイザーの指導の下、企画・準備・運営を主体的に担う学生主導のプロジェクトである。学生の実行委員が、毎年12月上旬の週末に開催されるKISSのテーマを選定し、広く参加者を公募する。KISSは、１泊２日の合宿形式で、学外の研修施設にて開催される。一般学生25名、留学生25名の合計50名が１泊２日、寝食を共にし、日英のバイリンガルで討議を重ね、最終日には、グループごとに議論の成果を日英両言語で発表する。KISS終了後は、実行委員が振り返りの報告書を日英で作成し、約半年にわたるKISSの一連の活動が修了するという流れである。

このKISSにおける一連の活動を有機的に結び付ける新たな試みとして、平成25年度（2013）後期より、全学共通授業科目（グローバル共通科目）「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」（バイリンガルの国際共修授業）として開講している。本稿では、「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」開講に至った経緯を概観した上で、バイリンガル国際共修授業の制度設計、及び授業での活動内容に焦点を当てて報告する。

1.「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」開講の経緯

第１回から第18回KISSは、正規の授業科目ではなく、課外活動として実施してきた。具体的には、毎年６月～９月頃にかけて、留学生センターの教員（２～３名）が、実行委員となる学生（一般学生･留学生10名前後）を募り、リーダー、ザブリーダーを筆頭に実行委員を組織し、その後、実行委員の学生達が、放課後や昼休みの時間を利用して、12月に開催されるKISSを企画、準備、実施する。１泊２日、オフキャンパスの研修施設にて開催されるKISSには、実行委員の学生も含め、一般学生25名、留学生25名が参加し、シンポジウム終了後、実行委員が振り返りの報告書をバイリンガルで作成するという形態を採っていた。KISSの実行委員は、多国籍のメンバーで構成されるため、当然のことながら、各実行委員の日英の言語力、物事の進め方、議論に参加する際の態度など、行動様式は多様である。KISS実行委員の活動の醍醐味は、KISSの開催という共通の目的に向けて、多様なメンバー間で切磋琢磨しながら協働していくことにあり、その過程における学びには、有形無形の意義が認められる（實平・河合・瀬口2004）。

しかし、筆者らが、教員のアドバイザーの一人として活動に携わる中で、2010年頃からKISS実行委員の活動を課外活動として位置づけることの限界を認識するに至った[3)]。その背景には､様々な要因があるが､KISS実行委員を務める学生達が年々多忙になり、企画、準備に携わる時間を十分に確保することが極めて困難であったことが主因として挙げられる[4)]。課外活動であるため、定期的に実行委員が顔を合わせる時間を調整するのが難しく、対面での協働の機会が限定的となっていった。それに伴い、実行委員間の信頼関係構築に支障をきたす例が見られ、一部の学生に過度に負担が集中するなどの問題がみられた。またICTの急速な進化に伴い、1995年当時には、対面でしか出来なかった意見交換や書類作成などの作業が、E-MailやSNSを通して可能となった。ICTの進化は、作業の効率化や情報の共有などの面において、KISSの一連の活動に非常に多くの便宜をもたらしたが、その一方で、実行委員同士が物理的に時間と空間を共有する機会が著しく減少していくことにも繋がった。結果、KISSの内容、特に報告書の内容が希薄になり、明らかな質の低下が見られるようになった。

堀江（2015）は、Allport（1979）が提示した多文化接触が偏見の軽減につながる諸条件を踏まえ、多文化間接触の教育効果を高めるための条件として、1）言語、人数、場所、知識量などの点において、各文化グループが平等な立場にあること、2）学習目標、達成目標、評価基準などの点において、共通の目的を有すること、3）

教員、TA、授業外の相談、多文化共修の価値の理解など、制度的なサポートがあること、の３点を挙げている。

筆者らが実際に教員アドバイザーとして携わったKISS第16回以降の実行委員の活動を振り返ってみると、堀江（2015）が指摘した３点、特に学びの場の制度的保障という面において不足がみられ、結果、KISS実行委員の活動の質の低下につながったと考察できる。

このように、KISS実行委員の学生達が、協働し共に学ぶ時間と空間をいかに制度的に保障するかが喫緊の課題であった。そのような折、神戸大学が「グローバル人材育成推進事業」に採択されたことを受け、KISS実行委員が課外活動として行ってきた一連の活動を教育として位置づけ、授業として学びの場を制度的に保証する仕組みを構築するべく検討を開始した。1995年のKISS創設以来、KISS実行委員が従事してきた活動は、「卓越したコミュニケーション能力を備えた問題発見型リーダーシップを発揮できる人材の育成」という本学が掲げる「グローバル人材育成推進事業」の趣旨に沿うものであり、学内関係部局の理解を得て、平成25年度（2013）後期より、全学共通授業科目（グローバル共通科目）として、「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」開講するに至った。KISS実行委員らが行ってきた「学び」を授業の枠組みの中で、制度的に保障する仕組みが構築された。

２.「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」の概要

「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」は、本学大学教育推進機構国際教養教育院が実施・運営する全学共通授業科目として位置づけられており、留学生を含む全学の学部正規生に履修の機会が与えられている[5)]。本学では、交換留学生（特別聴講学生）等が、全学共通授業科目を履修することは制度上認められていないが、本授業の性質上、多様な文化的・言語的背景を持つ留学生の受講が望まれるため、特別に内規を定め、本授業科目に限り、交換留学生（特別聴講学生）等の履修を許可している。

図１は、「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」の授業科目と、KISSとの関連を示したものである。

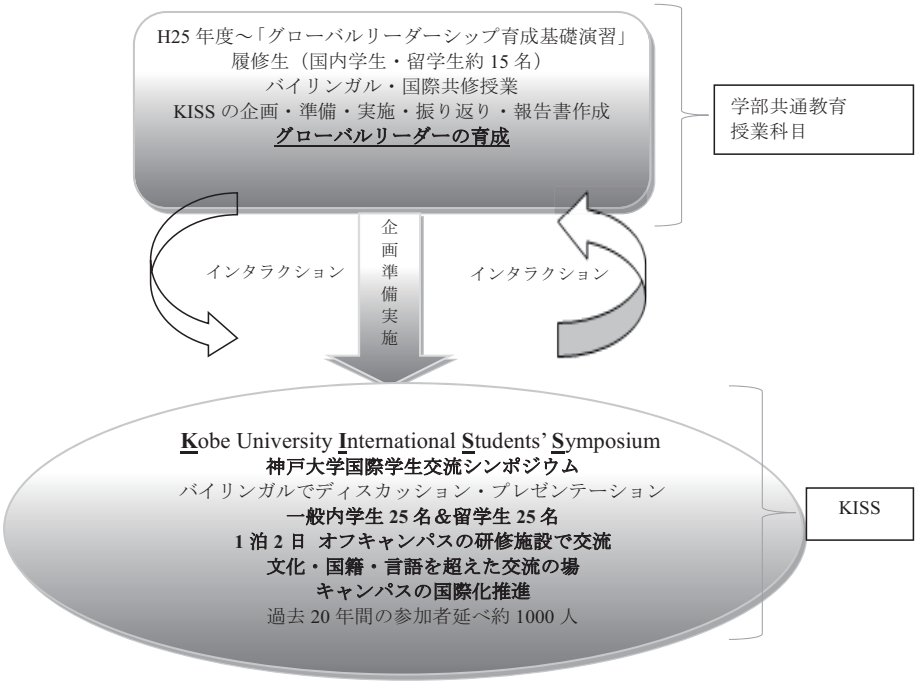

図１　授業科目「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」とKISSの関係

前述の通り、本授業は、一般学生と留学生が毎年12月に開催されるKISSの企画、立案、準備、運営を協働で行う、一連の活動を「教育」として位置づけ、設計したものである。すなわち、これまで学生実行委員が行ってきた活動を、20人前後の受講生（一般学生・留学生）が担うこととなった。KISS自体については、１泊２日、オフキャンパスの研修施設での実施、日英のバイリンガルでのディスカッション・プレゼンテーション、一般学生25名、留学生25名の50名の参加など、従来通りの形態を踏襲している。また､これまで教員アドバイザーとして関わってきた筆者らが、授業担当を務めることとなった[6)]。

３．授業設計の理論的枠組みと到達目標

3-1.「異文化間リテラシー」「異文化間能力」

通常、新たに授業科目を開講する場合、授業のテーマや到達目標を設定した上で、具体な授業内容や授業スケジュール、授業での活動などを検討するであろう。これ

に対して「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」では、従来、課外活動として実施してきた一連の教育活動をどのように授業の枠組みに当てはめていくか、既存のKISSの形態を維持しつつも、正課授業として更に学生の学びを充実させ、また学びの成果を適切に評価するシステムを構築するかという点を検討することとなった。

授業設計に際し、筆者らが教員アドバイザーとしてKISSの活動に関わる中で、経験的に認知してきた学生らの「学びの成果」を、改めて「異文化間リテラシー」、「異文化間能力」、「異文化間コミュニケーション能力」の涵養という側面から捉えなおすことから着手した。以下、これらの概念について、主要な先行研究の知見を踏まえた上で、授業設計の理論的枠組みと本授業の到達目標について述べる。

坂本（2013）は、「異文化間リテラシー」について、文化人類学、異文化間教育、異文化理解教育などのそれぞれの学問分野において様々な定義がなされてきたと指摘し、「異文化間リテラシー」における「リテラシー」の定義を、異文化に対する理解などの「知識」のレベルに留めているもの、更に踏み込んで、「能力」や「資質」に言及しているものと大きく２つに分類している。後者の立場を取るものとして山岸（1997）は、「異文化間リテラシー」を「多文化共存をめざす社会に生きる人々に求められる能力や資質」としている。

また、「異文化間リテラシー」と類似の概念として、「異文化間能力」（Intercultural Compitence/Intercultural Compitenceis）という用語も広く用いられている。「異文化間能力」も「異文化間リテラシー」同様、その定義は極めて多岐にわたり「異文化間能力」をどのように定義するかについて研究者の間でも明確なコンセンサスが得られているわけではない（Deardorff, 2006）。このような中、Deardorff（2006）は、「異文化間能力」の測定、評価に関する議論の前提として、「異文化間能力」に関連する先行研究を検証した上で、米国の高等教育機関に在籍し、国際教育の分野の研究に従事する研究者や専門職員を対象に調査を実施している。これらの検証の結果を踏まえ、Deardorff（2006）は、異文化間能力のプロセスモデルを提唱している。Deardorff（2006）の提示した異文化間能力のプロセスモデルは、異文化間能力の成長の過程を表すもので、個人の態度（他の文化を尊重する態度・開かれた態度・好奇心と発見）を起点とし、知識・理解力（自文化に対する自覚・文化に関する深い知識・社会言語的意識及び、聞く・観察・解釈・分析・評価・関連付けるスキル）を身につけることにより、個人の内面に順応性、柔軟性、文化相対的視点、エンパシーなどの望ましい自己変容（Desired Internal Outcome）が生じ、更には、

異文化接触場面において、効果的かつ適切な行動が取れるようになるなど、望ましい外的成果（Desired External Outcome）に繋がるという一連のプロセスを表している。

一方、欧州では、欧州評議会（Council of Eupore）の言語政策部門（Language Policy Division）を中心に、言語政策の一環として、異文化間能力に関する研究が進められてきた。例えば､2001年に欧州評議会によって制定されたCEFR（Common European Framework of Reference for Languages・ヨーロッパ言語共通参照枠）では、学習者が備えるべき能力の一つとして、異文化間技能（Intercultural Skills）や、世界や社会文化に関する知識などに関する言及が見られる。また、欧州評議会から出されたByram et al.（2002）の論考において、異文化間能力を構成する５つの要素､「知識」「異文化に対する態度」「異文化を自文化と関連付けて解釈する技能」、「新たな知識を発見し、コミュニケーションの中で使用する技能」、「自文化、異文化双方に対する批判的な視点･気づき」を挙げている。また､川那部（2006）は､「異文化間能力」に関して、認知的（congnitive）、情動的・感情的（affective）、行動的（behavioral）という３つの局面があることを指摘している。

以上､「異文化間リテラシー」及び「異文化間能力」に関する先行研究を概観し、様々な定義を見てきたが、先行研究での議論を踏まえた上で、筆者らが実践するプロジェクトベースの国際共修授業では、まず認知的局面における異文化間能力として､「多様な文化的・言語的背景、価値観を持つ学生達が、KISSの開催という共通の目標に向けて切磋琢磨しながら協働することを通じ、社会の様々な事象を多様な視点から捉えなおすこと」を到達目標とした。更に、プロジェクト遂行に至る過程における一連の活動（情報収集・議論・折衝・発表・振り返りの報告書執筆）を通して、実践的な「異文化間能力」を涵養することも到達目標とした。ここで言う実践的な「異文化間能力」とは、異なる行動パターンや思考回路を持つ仲間たちとコミュニケーションを取り、文化接触に伴う葛藤などを克服しつつ、プロジェクト遂行のために良好な人間関係を構築し､「協働する姿勢・能力」である。異文化間能力の行動的局面と言い換えることができるであろう。

3-2. 共生・協働のための「異文化間コミュニケーション能力」

更に本授業では、単なる言語能力ではない､「異文化間コミュニケーション能力」を向上させることを授業の到達目標としている。KISSは、1995年の初回より、ディスカッションでの使用言語を日本語と英語のバイリンガルとしている｡その理由は、

神戸大学に在籍する留学生の多様な言語レベルに配慮したことによる。留学生の中には、両言語とも非常に堪能な者、日本語が堪能な者、英語が堪能な者、いずれの言語も初級或いは中級段階に留まっている者など、極めて多様である。一般学生は、ほぼ全ての学生が日本語母語話者（或いは、日本語ネイティブレベル）である。中には、帰国子女や英語圏での留学を経験し、英語能力がネイティブレベルの者から、簡単な英語での会話が可能な者、或いは英語能力には全く自信が無いが、留学生との交流を望んでKISSに参加する者などこちらも多様である。このように、KISS参加者のコミュニティーは、多文化・多言語である。このようなコミュニティーの中で、参加者同士が議論を進め、グループでプレゼンテーションを準備する。その過程において、日英両言語を始め、時には、その他の言語を駆使して、意思疎通をはかる姿が見られる。

一方、課外活動としてKISSを実施してきた段階から、具体的な数値は示すことが出来ないが、KISSの実行委員を務める学生の日英の言語運用能力は比較的高い傾向が見られた。平成25（2013年度）より、授業科目として開講してからは、履修定員を設定している関係上、エントリーシートと日英のグループディスカッションによる履修生の選抜を行っている。日英両言語の運用能力（ディスカッションでの発言、他者の意見の理解）も、履修者選抜の一つの指標としているため、自ら一定程度の言語運用能力を備えた学生が履修許可の対象となっている[7)]。しかし、本授業では、単に日英両言語の運用能力の向上に重点を置くのではなく、多様な言語的背景を持つKISSの参加者を迎える側として、他者の言語能力に配慮したコミュニケーション能力を向上させることを目標としている。この目標に向けて、具体的にどのような工夫を行っているかについては、次節以降、改めて言及したい。

なお、本授業では、学生の言語運用能力の向上を優先しているわけではないが、留学生の場合は、日本語（及び英語）、一般学生の場合は英語を「使う機会」を通して、自らの言語運用能力を向上させることを履修希望として挙げるものが多数を占める。プロジェクト型の授業であるため、英語・日本語を使う活動が多く盛り込まれており、筆者ら授業担当教員及び、ピアの学生からのフィードバックも得られる。これらの活動を通して、一般学生も留学生も、個人差があるものの学期の終わりには、特に「話す・書く」というアウトプットの言語能力の伸長が認められる。そこで、自らの意見（グループの意見を含む）を、多文化･多言語のコミュニティーに対して、発信するスキルを向上させることも本授業の到達目標の一つに加えている。

3-3. 授業の到達目標

以上、本節で見てきたように、「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」では、大きく３つの到達目標を設定した。表１は、本授業の到達目標をまとめたものである。

表１ 「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」の到達目標

授業の到達目標	理論的枠組み
１．多様な文化的・言語的背景、価値観を持つ者同士、協働することを通じ、社会の様々な事象を多様な視点から捉えなおす。	異文化間能力における認知的局面
2. プロジェクト遂行に至る過程における一連の活動を通して、異なる行動パターンや思考回路を持つ仲間たちとコミュニケーションを取り、実践的な「異文化間能力」を涵養する。文化接触に伴う葛藤などを克服しつつ、プロジェクト遂行のために良好な人間関係を構築し、「協働する姿勢・能力」を身につける。	異文化間能力における行動的局面
3. 多文化・多言語なコミュニティーのメンバーと協働するための異文化間コミュニケーション能力を向上させる。日英両言語で自らの意見を発信するスキルを向上させる。	多文化共生・協働のための異文化間コミュニケーション能力

以下、次節では、到達目標の達成に向けて、「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」の授業内外でどのような教育活動を取り入れているのか、具体的な授業スケジュールと共に紹介する。

４．「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」の授業内容

4-1. 導入部分

当該授業は、後期（10月～２月）開講科目、週１回、１コマ（90分）、合計16コマ（15コマ授業、１コマ試験）で、２単位が付与される科目となっている。具体的な授業スケジュール及び授業での活動内容を記したものが表２である。

第１回目の授業では、授業の内容に関するガイダンスを実施している。KISS誕生の経緯、KISSの20年にわたる沿革を振り返り、KISSの理念と合わせて、授業の到達目標、評価について、詳しく説明する。平成27（2015）年度の第１回目の授業は、10月１日に開講したが、後期より新規に渡日し、本授業の履修を希望する日本

語日本文化研修生や交換留学生等は、渡日直後のオリエンテーション等の都合で、第１回目の授業から参加することが困難であった。そこで、これらの学生達に、第２回目からの授業参加を認め、授業履修者選抜のグループディスカッションを行った。履修者選抜の結果、平成27（2015年度）は、一般学生９名、留学生８名の合計17名の履修が決定した。留学生の国籍は、ベトナム２名、ポーランド２名、中国、韓国、マレーシア、オーストリアが各１名となっている。履修者の所属学部は、国際文化学部６名、経営学部３名、法学部・農学部・理学部から各１名、留学生センター所属の日本語日本文化研修生が５名となっている。学年は、１年次２名、2年次４名、３年次２名、４年次２名、その他特別聴講学生等（交換留学生、日本語日本文化研修生）が、６名となっている。

表２　「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」授業スケジュール・内容

第１回	ガイダンス	授業の概要・評価に関する説明 神戸大学国際学生交流シンポジウムの理念・沿革について説明 ※授業後オンラインでエントリーシート提出
第２回	イントロダクション 履修者選抜	KISSの運営形態に関する説明 グループディスカッション(日･英)による履修者の選抜
第３回 第４回	メインテーマの検討	当該年度のKISSのメインテーマの検討 ※リーダー・サブリーダー・各分科会リーダーを選出
第５回 第６回	サブトピックの検討	分科会のサブトピックを検討 ※授業外でシンポジウムポスター、申込書等の作成
第７回	KISS分科会でのディスカッションの進め方	授業担当教員による講義・ワークショップ
第８回 第９回	KISS分科会に向けた資料収集・資料作成	グループワーク
第10回 第11回	KISSリハーサル	KISSの司会進行、分科会ごとのイントロダクションのリハーサル
第12回 第13回	KISS開催	１泊２日のシンポジウム運営 ※２回分の授業としてカウント
第14回	KISS振り返り	日英の報告書作成開始 ※12月下旬にKISS報告書草稿提出
第15回	KISS報告書草稿確認 最終グループ発表準備	グループワーク
第16回	最終グループ発表	グループ発表（試験）・授業総括 ※１月下旬に、学期末個人レポート及びKISS報告書最終原稿提出

第２回目の授業終了後、履修者が確定した段階で、受講決定通知のメールと共に、課題を与えた。課題は当該年度のKISSのメインテーマとして、どのようなテーマを取り上げたいか、またその理由を日・英で記述し、提出するというものである。第３回目、第４回目の授業では、各自が提出したメインテーマの案について、学生達が意見を出し合い討議を重ねた。本授業は、バイリンガルで実施しているため、授業時間を適宜区切り、冒頭20分は日本語でディスカッション、続く20分は英語でディスカッション、残り時間は、日英どちらでも発言可といった方式を採用している。授業中にバイリンガルでディスカッションを重ねることにより、お互いの語学力に配慮したスピードでの発話や、言い換えなどのスキルを相互に学び、KISSのバイリンガルでの運営に備えることとしている。

ここで改めて、KISSの実施形態の詳細について、2015年度のKISS21を例として確認しておきたい。



図２　KISS21運営形態

KISSの運営は、リーダー・サブリーダーが中心となり進めていく。リーダー・サブリーダーは、第３回目の授業後、立候補を受け付け、授業担当教員が立候補者の中から決定した。また、KISSでは、50名の参加者が、５つの分科会に分かれて議論を行う。各分科会にも、それぞれその分科会での議論をリードする学生を配置

する。グループ分けに際しては、学生の母語、言語能力、学年等を考慮した。図２は、KISS21の運営形態を表したものである。

KISSの企画に際し、最も時間を要する点はメインテーマを設定することである。個々の学生達が、それぞれメインテーマの案を持ち寄るところから始まり、英語・日本語で討議を重ね、意見をすり合わせ、調整しつつ、17名の学生が一つのテーマを決定する。KISS21については、第3回から第４回の授業中の討議に加え、神戸大学が導入しているLearning Manegement System（Moodle)、「神戸大学LMS BEEF: Basic Environment for Educational Frontier 2015」（通称、BEEF）のオンラインフォーラムサイト、並びにFacebook上での意見交換を経て、第５回目の授業でようやくメインテーマ及び各分科会のサブトピックの決定に至った。KISS21のメインテーマは､最終的に「架け橋―Building Bridges」となった。本メインテーマを設定した趣旨について、KISS21リーダー（実行委員長）のサンドラ・ボーラウフ氏は、KISS21の参加者向け案内文に、以下のようなコメントを寄せている。

> KISSの初回から21年が経つ今年、私たちはそのルーツをたどり、「お互いに助け合い、分かり合う」というKISSの原点に立ち返りました。いま、世界は密接につながり、かつて遠かった世界も身近なものになっています。これまで以上に相互理解の必要性が増してきているのです。そこで今回のKISS21では、離れた２つの陸をつなぐ明石海峡大橋のように､コミュニケーションや価値観、学生生活といった事柄に関する5つのトピックを議論することで、異なる文化や人々の間に「橋を築く」ことを目的にしました。参加者の皆様との議論を通して､私たち一人一人が築ける小さな橋をつなげ､未来に大きな橋を築きましょう！　KISS21実行委員長　サンドラ・ボーラウフ

4-2. KISSの準備（グループワーク及びフィードバック）

KISSのメインテーマ及び各分科会のサブトピック決定後は、リーダー・サブリーダーを中心に、授業内外での活動を学生主導で進めていく。KISSの広報のためのポスター及び申込書の作成、当日のスケジュール策定等の作業などは、リーダー・サブリーダーが授業時間外にこれらの作業を担った。合計５つの分科会を担当する学生達は、各グループのグループリーダーを中心に、KISS当日、どのようにディスカッションをリードしていくのかを念頭に、準備を進めていく。当日のシンポジウムで用いる資料は、全てバイリンガルで準備するため、留学生と一般学生が協力

して作業を進めていく。

また、一般参加者の募集が終了した段階で、KISS参加者の分科会への割り振り、研修施設の部屋割り、KISS参加者へのメール（日・英）での事務連絡等も、学生達が分担して作業に当たる。

授業担当教員は、「アドバイザー」として授業内外での学生の活動を確認し、適宜、助言を行うなど、教育的介入を行っている。

また、2015年度から、BEEFのフィードバック機能を活用している。授業後に学生自らが、授業中の議論への参加、日・英両言語でコミュニケーションにおいて気を付けたこと、授業を通して気が付いたこと、更にグループワークでの活動内容及び、グループ活動への貢献度などを授業終了後に自ら振り返り、BEEF上で回答するという振り返りの活動を取り入れている。授業担当教員は、学生のフィードバックコメントを確認し、時機逸することなく必要に応じて、助言を行っている。



図３　KISS21ポスター
神戸大学国際文化学部　田中香子氏作成

4-3. KISSの当日の運営と終了後の振り返り

１泊２日のKISSの運営は、バイリンガルでの司会進行、ディスカッションのファシリテート、交流会等の企画、実施等、全てリーダー・サブリーダーを中心に、学生達が担う。表３は、KISS21のスケジュールを表したものである。KISSのスケジュールは、毎年、当該年度の実行委員の学生（履修生）が、決定するため、多少の変更があるが、ここ数年は、１日目にディスカッション（午前・午後）、２日目午前に、各分科会による日・英でのグループプレゼンテーション、最後に全体ディスカッションで締めくくるスケジュールとなっている。

１泊２日のKISS終了後の授業では、KISSの振り返りの活動に入る。クラス全体

で、振り返りのセッションを持った後に、KISSの報告書の作成、学期末のグループプレゼンテーションの準備に取り掛かる。学期末のグループプレゼンテーション（日・英）では、企画、準備、当日のKISS運営について、分科会ごとに活動内容を振り返り、活動を通してどのような気づきや学びがあったのかを発表する。

報告書には、KISSの企画、準備、当日使用した資料やディスカッションの要旨に加えて、参加者を対象に実施したアンケート調査の結果、写真等を収録している。

学期末のグループプレゼンテーション、報告書作成の活動は、グループワークの一環として行うが、これとは別に、学期末の個人レポートの提出を義務付けている。一般学生は英語で、留学生は日本語で個人レポートを執筆し、自らの活動・授業を通して得た学びを内省し、総括する。

表３　KISS21スケジュール

1日目	
9:00	留学生センターに集合
9:30	出発
10:15	研修施設に到着
10:30	開会式
10:45	グループディスカッション１（80分）
12:05	レクリエーション（30分）
12:35	昼食（各自持参）
13:20	グループ交換（30分）
13:50	休憩
14:00	グループディスカッション２（80分）
15:20	休憩
15:30	プレゼン準備１（90分）
17:00	自由時間
18:00	夕食
19:00	交流会
2日目	
8:00	朝食
9:00	プレゼン準備２（30分）
9:30	グループプレゼンテーション（60分）
10:30	全体ディスカッション（105分）
11:45	閉会式・記念撮影
12:00	現地解散

4-4. 評価について

最後に、本授業で採用している学生の評価指標について、述べておきたい。本授業では、プロジェクトベースの授業であり、グループワークを数多く取り入れていることから、出席率は90％以上を要求している。評価については、授業・KISSへの参画（50%）、グループで行う振り返りのKISS報告書作成（25%）、最終グループ発表（10%）、学期末の個人レポート（15%）で総合的に評価している。平成26（2014）年度までの授業では、教員による評価のみを採用していたが、平成27（2015）年度

より、先に述べたBEEF上での自己の活動の振り返りと学生同士のピアレビューを取り入れることとした。授業での活動だけでなく、授業外でのグループワークにおいて、個々の学生がどのような貢献をしたのか、自己評価とともに、学生同士がそれぞれの貢献を評価し合うシステムを取り入れることにより、より公平かつ適切な評価を行うことを意図している。

おわりに

以上、本稿では、1995年より継続して実施しているKISSの教育活動を概観したうえで、「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」開講に至った経緯を紹介し、バイリンガルの国際共修授業科目の制度設計、及び授業での活動内容に焦点を当てて報告した。課外活動としてのKISSは、1995年から20年以上にわたり継続して実施してきたが、正課授業として「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」を開講したのは平成23（2013）年度からであり、まだ３年目である。筆者ら授業担当教員も、毎回の授業を通して、履修生達と「協働」しつつ、授業内容、学生の評価方法など、日々試行錯誤しながら、改善を試みている状態である。特に、本授業のようなプロジェクトベースの授業においては、学生の成績評価、また学生の学習成果としての異文化間能力（認知的局面､行動的局面及び情動的局面）及び異文化間コミュニケーション能力の伸長をどのように評価するかといった点について、更に実証的に検証する必要がある。また、「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」とKISSとの関連、特に本授業の履修生（KISS実行委員）が、KISSを開催することにより、KISSに参加するその他の学生達にどのようなインパクトをもたらしているかなど、多角的な分析が必要であろう。これらの点については、履修生の受講動機、フィードバック、ピアレビューの結果、またグループプレゼンテーションや個人レポートの内容を質的に分析することにより、別稿にて、明らかにしていきたい。

注

1）1995年、当時の神戸大学西塚泰美学長が、国際的な医学賞であるWOLF財団賞を受賞し、WOLF賞の副賞（５万米ドル）を被災留学生のために役立ててほしいとその全額を神戸大学に寄付した。その後、神戸大学では、地域の篤志家寄せられた留学生への寄付も合わせて、基金を設立した。この基金の資金の一部を用いて、当時の留学生センターの教員がKISSを創案し、学生の実行委員を募り、第１回KISSの実施に至った。

2）本稿における「留学生」の定義は、「留学」の在留資格により、神戸大学に在籍している学生とする。「一般学生」の定義は、本稿における「留学生」の定義に該当しない神戸大学の在籍学生とする。

3）本稿の執筆者のうち、ハリソンは第10回KISSから、黒田は第16回KISSから現在まで、教員アドバイザーを務めている。

4）特に、ほぼ全ての学生が放課後のアルバイトに従事しており、個々の学生の予定を調整して、放課後に集まれる時間を確保することが極めて困難であった。また、年度によっては、12月から企業による採用活動が解禁になったことがあり、就職活動で多忙を極める学生もおり、KISSの活動に十分な時間を充当することが難しくなる例が散見された。

5）当該授業科目は、制度改編等を経て、平成27年度（2015年度）全学共通授業科目の中核的な授業科目群である「教養原論」に指定されている。

6）本稿執筆者の黒田、ハリソンが、授業担当教員を務めている。

7）留学生の場合は、日本語能力試験N2レベル以上、一般学生の場合は、TOEIC700点台以上の者が、履修者として選抜されることが多いが、言語運用能力（Proficiency）はあくまでも指標の一つに過ぎず、履修の動機も同様に重視している。

＜引用文献＞

（日本語文献）

坂本利子（2013）「異文化交流授業から国内学生は何を学んでいるか:多文化共生力育成をめざして」『立命館言語文化研究』24（3），143-157.

川那部和恵（2006）「異文化理解教育における実践的アプローチの可能性」『奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要』15, 53-60.

堀江未来（2015）「多文化共修を促すコミュニティ形成と授業運営」第34回神戸大学留学生センターコロッキアム（於：神戸大学）発表資料

實平雅夫・河合成雄・瀬口郁子（2004）「キャンパスにおける交流プログラムが日本人学生に与えるインパクト―神戸大学国際学生交流シンポジウムを事例として―」『神戸大学留学生センター紀要』10, 85-104.

山岸みどり（1997）「異文化間リテラシーと異文化間能力」『異文化間教育』11, 37-51.

（英語文献）

Allport, G. W. (1979). *The Nature of Prejudice.* Cambridge, MA: Perseus Books.

Byram, M., Gribkova, B., & Starkey, H. (2002). *Developing the intercultural dimension in language teaching: A practical introduction for teachers.* Strasbourg: Council of Europe.

Deardorff, D. K. (2006). Identification and assessment of intercultural competence as a student outcome of internationalization. *Journal of Studies in International Education*, 10(3), 241-266.

A Report on a Bilingual International Integrated Course at Kobe University: The Design of "Introductory Seminar for Promoting Global Leadership"

KURODA Chiharu
Richard HARRISON

This paper will report on the design of a new course at Kobe University, which aims to train both International and Japanese students in a range of competences needed to design, implement and organize a two day symposium (KISS), that has been held every year since 1995. Firstly, we will present an outline of this new course and how it relates to the former KISS symposium. Secondly, we will present the theoretical and background, looking at intercultural literacy, intercultural competence, and intercultural communication from cognitive and behavioral aspects. This includes a discussion on the use of a Social Media system installed at Kobe University, and how it affects communication between the students and provides feedback to the teachers. Finally, we will look at the limitations of this project and areas for further research, including the needs for empirical research on 1) project based learning, especially the difficult issue of evaluation 2) the dynamic between this seminar and the main KISS symposium, and 3) a detailed study of student participation and learning activities observed over the six months of the seminar.